

北齋 殺人事件

高橋克彦



講談社
文庫

ほくさいきつじん じけん
北斎殺人事件

たかはしかつひこ
高橋克彦

© Katsuhiko Takahashi 1990

1990年7月15日第1刷発行

発行者——野間佐和子

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112-01

電話 東京(03)945-1111(大代表)

Printed in Japan



講談社文庫

定価はカバーに
表示してあります

デザイン——菊地信義

製版——豊国印刷株式会社

印刷——豊国印刷株式会社

製本——加藤製本株式会社

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。
送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内
容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いい
たします。(庫)

ISBN4-06-184715-5

江苏工业学院图书馆
講談社文庫
藏书章
北斎殺人事件

高橋克彦

講談社

目次

プロローグ

胎動

フェノロサ・ライン

小布施行き

北斎宗理辰政

妖怪

183 142 104 59 11 7

北齋隱密説

悲劇

逆説的犯罪

エピソード

あとがき

解説

中島河太郎

441 438 425 340 276 228

北齋殺人事件

プロローグ

壁に巨大な軸装の絹本けんぼんが飾られてある。

画面は縦百六十センチ、横百三十センチ。絹本としてはあまり類を見ない大きさだ。題名は描かれていないが一目で宗教に主題を求めた作品と分かる。

上半分を占める空には荒々しく青白い炎を放つ竜が飛行し、その背の上には薄い衣を纏まとった五人の仏たちが立ち並び柔和にゆうわな目で地上を見下している。仏たちのまわりは漆黒しつこくの闇だ。白く流れる雲が足許あしもとにからみつき、それぞれの下半身を覆い隠している。闇の中にひとつポツンと光のように輝くものがある。痩せた仏が手にする野生の花の黄だ。よく見ると、それは金色に燃える竜の両眼と細い三角形を成していて、暗い画面に緊張を与えている。偶然に描かれたものではない。

目を画面下半分に転ずると、極彩色の地獄図絵が展開されている。腹を脹からませた屍しかばねが累累るる

と白っぽい砂地に打ち捨てられ、黒光りした烏が群がっている。体内に充滿したガスが薄い皮を破り、赤い臓物がはみでている屍もいくつか数えられる。あるいは烏によって喰い散らかされたあとなのかもしれない。いや、どうやら違っていたらしい。烏はむしろ後始末の役割を担っているだけで、それらを食べていたのは、おなじ人間なのだ。

左側に目だけをギラギラさせて佇む五、六人の痩せ細った裸の男女の口許にはドス黒い血がこびりつき、中には切りとった細い腕を大事に抱えている老女もいた。餓鬼たちだ。彼らの腹も異様に脹らんでいる。ただ、屍との差はガスとは異なる固い質感だ。陰影と絵の具の微妙な色の違いだけで、双方の腹の中を想像させる絵師の力量は相当のものだ。

砂地は海の近くを意味しているのか。波こそ見えないが、右下に根元を見せ画面外に消えていく松の巨木がそれを暗示している。吹き荒れているのは生温い風だろう。根元から砂煙が舞い上がり、巨木に沿って大気が動いている。奇妙に白々とした松の木肌が魚のうろこのような不気味な印象を見るものにうえつける。まさに地獄である。

そう思つて眺めると、画面の中ほど、空と地上との間に別の地獄が望見された。遠近法が巧みに用いられている。

どうやらそちらは紅蓮の炎渦巻く世界のようなだ。豆粒大の焼け爛れた男女たちが必死に燃え盛る炎から逃れて泣きわめいている。苦悶の叫びが耳に響いてくるような気がする。そばにある池のほとりでは孕み女の腹が切り裂かれ、小さな赤子が二匹の鬼によって双方から腕を引き千切られようとしている。目を背けてしまいたいほどに残酷な光景だ。

地獄の荒涼たる描写は、毒々しい絵の具によって余計に増幅されている。反対に仏たちは深い淵の色のように穏やかで、むしろ水墨画の趣おもむきさえ感じさせた。静と動。明と暗。善と悪。美と醜。あらゆるものの対比がここにはあった。

絵師の名は松の根脇に太く黒々と署名されている。自信に溢れた書体である。
北斎宗理辰政。

もつとも辰政は朱色の丸印の中に刻まれた号であって、自筆ではない。

掲げられた絹本の下には細長い黒漆うるしの箱が蓋を開けられて置かれてあった。軸が入れられていた箱であろう。蓋の裏側に文字が読みとれる。美術品につきものの箱書はしがきだ。

見事なる哉かな。黄の小さき花の天光の如し。仏の慈悲あまね普く穢土えとどに及ばん。余ここに佇みてしばし嘆息す。絶佳。綺想。天心——

天心とあるのは、おそらく近代日本美術の理論的指導者だった岡倉覚三のことであろう。とすれば箱書はしがきは天心がこの北斎を前にして連ねた賛辞と思える。しかし、箱書はしがきはそれだけで終わっていない。すぐ左隣には中太の筆でしたためられた英文が書かれてあるのだ。誰の手になるものか最近になってから翻訳されたらしく、薄い紙が脇に貼られていて、細かな文字でその内容が示されていた。

宗理時代の技量を示す大作。北齋の純粹な力は本図にて知らる。可愛らしい花の黄が構図を引締め偉大な芸術に近づけている。宗教に深い関心を寄せていた北齋ならではの視点がはつきりと見られる。しばしば彼がおちいる構成の複雑さによる主題の破綻はたんもこの作品には一切うかがわれない。空と地上とを分断したことが幸いしたのである。オカクラは作品上にふたつの主題ありと我に語り。その対立が平俗さから抜けださせているのであろう。1901年6月。
アーネスト・F・フェノロサ――

胎動

1

ボストン市××地区。

木枯しの中から二人の男がやってきた。

今にも剥はがれ落ちそうな古いタイルのアパートの前に立止まると、二人はほとんど同時に通りに面した三階の窓を見上げた。右から順に視線を動かしていく。四番目。ヒビ割れに貼られた紙テープが茶褐色に変色している。人の気配はもちろんない。

「生きものを飼ってなきやいいんだが」

年嵩としかさの男が呟いた。殺された男が間違はなくあの部屋の住人なら四日も留守にしたことになる。七十二になる年寄りの一人暮らしに動物が同居していて不思議はない。

「いたとしても鼠ですよ。ヤツは自分のエサにさえ手がまわらない様子でしたからね」

男とコンピを組んでいる若者が低く笑った。早く仕事を済ませて署に戻りたい。今夜は新人婦警の歓迎会がある。

「防毒マスクでも用意すりゃよかった。ただでさえ年寄りの部屋は臭いってのに……日本人とき

た」

「くだらんことを喋るな。市民権を持つレッキとしたアメリカ人だぞ」

男は若者を見据^{みす}えてからアパートに入った。

「これはこれはチャイミングなお部屋だ」

黒人の管理人がドアを開けるなり、若い方が口笛を吹いた。引きだしという引きだしが全部床に転がっている。蓋の開いた大型のトランクが汚れたベッドの上に放り投げられて、下着が部屋中に散らばっていた。切り裂かれた枕からウレタンが飛びだし、足の踏み場もない。まるで嵐にでも遭遇したヨットのキャビンのようだ。

「どうやら整理整頓は苦手な方だったらしい」

舌なめずりをして若者は上司を見た。

「誰か部屋に入ったか？」

面倒になったかと思ひながら男は管理人に訊ねた。厳しい口調になっている。管理人は慌てて首を横に振った。目に正直な驚きがある。警官を前にして平気で演技ができるほど器用なタイプじゃなさそうだ。少なくとも、こいつは関係ないな、男は思った。

「音は？ 聞いていないかね」

「まわりは耳の遠い年寄り連中ばかりですし」

管理人はおどおどとした顔で応じた。

「ジョーイ。この人と一緒に行つて被害者と親しかつた人間を見つけてくるんだ。もし、そんなヤツがいればだがな」

命令すると男は一人部屋に残つた。どうも妙な事件だ。今の今まで単純な物盗りか行きずりの犯罪だとばかり考えていたが、どうやら勘が外れたらしい。これだけ執拗に部屋を掻きまわしているところを見れば、殺人の背後になにかがありそうだ。恨みか？ いや、違う。恨みだけなら部屋まで荒す必要がない。犯人にとって致命的な物証でも残されていたのか？ その線はありそうだが、問題はそれがなんだつたかだ。家族もいない一人暮らしの被害者の部屋からなにが失くなつたかを突止めるのは骨が折れる。

へここの住人が盗みに入ったと聞かされる方が楽だな。結構厄介な仕事になりそうだ。それにしても、こんな安アパートに暮らす老人に、果たして殺されるに足るどんな立派な理由があるというのか？ 希望も楽しみもなく、すでに死んだもおなじ生活である。第一、解剖所見によれば重度の胃潰瘍に加えて栄養失調に近い肉体だ。犯人がナイフで手を下さなくてもあのままでは一年も保たなかつただろう。

男は暗い溜息を吐いた。

これ以上部屋を荒さないように入口近くに立ちすくみながら、男は視線をゆっくりと動かした。壁紙代わりに貼られているのはこちらで発行されている日本語の新聞だろう。相当黄ばんでいる。行きずり殺人でないとすれば日本語の分かる人間を捜査に加えなければならぬ。

フツと男は匂いを感じた。当座は締切つた部屋の穢かびの臭いだとばかり思っていたが、それとは

少し違う。ちょうど乾いたペンキのような匂いだ。

「見つけましたよ。すぐ下の階に住んでいる中国人のじいさんが頻繁ひんぱんに行き来を……どうかしましたか？」

「なんの匂いだろう。君は感じないか」

「日本人の臭いと違いますか」

「絵の具を溶く油、と違うか」

ジョーイの背後から顔中染みだらけの痩せた中国人が覗きこんだ。垂れさがった両の瞼まぶたの端に黄色い目ヤニがこびりついている。古着屋からでも貰ってきたようなジャケットの下からのぞく白いTシャツは垢にまみれ、あばら骨の形に脂あぶらが浮きでていた。夏からそのままなのだろう。今は汗を掻く季節じゃない。

「ああ、なるほど。そんな匂いだな」

男は名を訊ねると老人を部屋に招き入れた。

「昔はマスクもよく絵を描いていた」

「仮面？ マスコのことかね」

殺された男の名はシンジロー・マスコと聞かされている。

「自分では仮面と呼ばれる方が気に入っていたね。この街では東洋人、皆マスクを被かぶって生きてる」

「分かった——マスコは画家だったというわけだ。上手うまかったかね。金になるくらいに」

「さあ。私には分からないよ。部屋の中を捜せば古い絵がでてくると違うか」

老人は荒された部屋を眺めて言った。友人が殺されたというのに表情に特別な変化もない。東洋人はこれだからやりにくい。

「どうかな。捜したわけじゃないが、絵は残されていないようだ。あそこの壁の白い部分にでも飾られていたのかね」

窓の右横に縦横五、六十センチほどの白い空間がある。

「そうそう。けれど、何日前に彼が外したよ。確か若い女の絵だった」

事件前なら盗まれたかどうか迂闊に判断はできない。誰かに売った可能性もある。

「画家ならポストン美術館で殺されたのも不思議じゃありませんね」

ジョーイが頷いた。変死体発見の報を受けて現場にでかけたのは自分たちだ。背中に登山ナイフを突き立てられている死体は珍しくもないが、こんなに貧しそうな年寄りがなぜ美術館にいたのか、となれば疑問が残った。所持金はほとんどゼロ。絵を鑑賞するぐらいの金があったなら、その前にヌードルでも食った方がいい。そう思わせるに充分なカラカラに乾いた死体だった。

「しかし、ここ何年かは仕事をしていないようだ。ミスター・リヤン。むずかしいだろうが、この部屋からなにが失くなっているか後で見てもらえんかな」

「重要なことか？ それに頼まれても、マスクが大事にしていた品物まで私は知らんよ」
老人は面倒はごめんだとばかりに後じさりした。

「当然だ。あんたが知っているものだけの確認でいいんだよ。面倒にはならんさ」